

マルコによる福音書 13:14—27

「主イエスにお会いできる時まで」

2026年5月10日(主の日)

藤沢北教会牧師 長倉基

大学一年の時、年が一つ上の神学生が教会にいました。今は中堅のしっかりした牧師に
なられています。ある日曜日の夕方、教会から帰る時にその人がこんなことを言いました。
「僕たちは主イエスが再び来られると信じているけれど、実際に目の前に立たれて『わた
しが再臨のキリストだ』とおっしゃってもはたして、わかるのかな、と思うんだよね」・・・
「そういうものか」と思って聞き流してしまいましたけれど、後になってわたしたちの信
仰のあやふやさを課題にしていたのかな、と時々思い起こすことがあります。ところが、
本日の箇所には、「人の子」という言い方をしますけれど「人の子が来る時、それとわか
るように信仰をしっかりとちなさい」とは主イエスはおっしゃっていません。そうではな
く、誰もがそうだとわかる。はっきりとわかるように人の子＝キリストは来られる、と聖
書は記します。「このような苦難の後、太陽は暗くなり／月は光を放たず／星は天から落
ち／天の諸力は揺り動かされる。その時、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に載っ
てくるのを、人々は見る」。この天変地異が何を示しているのかははっきりとはわかりませ
んけれど、これほどのものを見逃す人がいるはずがないように、はっきりとキリストの再
臨をわたしたちは見ることになるというのです。キリストが再び来られる。これを「キリ
ストの再臨」がわたしたちの信仰の核心の一つです。このキリストの再臨の希望があるか
ら、わたしたちは今を生きることができるといってもよいものです。神学生だったあの
先輩には申し訳ないのですが、このキリストの再臨は、誰の目にはっきりとわかる。それ
ほどのこととして起こる、と本日の箇所は語ります。わたしたちに与えられた希望はそれ
ほどまでに確かなのです。

この、キリストが来られる時、それまでの世界は古い世界として終わります。いつか終
わりの日が来ます。この世界はいつか終わる、ということもわたしたちは信仰として持っ
ています。けれども、キリストの再臨が前提ですから、世の終わりといっても、小説や映
画などで描かれるような、地球滅亡とか人類滅亡といった悲惨なものではありません。聖
書を通して示される神の世界の終わりのご計画とは、キリストが来てくださって起こる、
この世界の完成、完全な救いです。もし、地球や人類が滅びてしまうことがこの世の向か
うところだというのであれば、わたしたちには希望がありません。今すべてが終わっても
構わないということになってしまいます。そうではないのです。今、さまざまな労苦や不
安、厳しい現実があるけれど、最後には主イエスが来てくださり、すべてを顧みてくださ
る。これが終わりの日の希望です。

けれども、先週聞きました直前の箇所ではその時まで、世界は苦難を経験するだろう、
と主イエスはおっしゃいます。しかしそれらの出来事自体が終わりなのではないので、慌
てたり惑わされたりしてはいけない、とおっしゃいました。一方教会は迫害されるであら

うとおっしゃる。けれども、そこでは聖霊が語らせてくださる。だから福音が世界に宣べ伝えられるために、教会は何も心配せずに主を証しすればよい、証しすることができると励ましてくださいます。そして、本当の終わりの時が来る。それはこれまでみたことのないほどの苦難を伴うのだ、と主イエスはおっしゃいます。その時には急いで逃げなさい、それは振り返ったり、ものを取りに戻ったりしてはいけない、身重な女性、赤ちゃんを抱いていなくてはいけない女性は、逃げづらいので悲惨だ、外に逃げることになるので冬は寒くて大変なことになる、とおっしゃいます。どうして主イエスはこんな悲惨なことをお語りになるのか、どうして神さまはこんな苦難を起こそうとなさるのか、と思うかもしれませんが。けれども、よく思い巡らせてみると、主イエスは決して大げさに誇張して語られているのではないと思います。それどころか主イエスは非常に冷静にこの世の現実を見つめておられると思うのです。ここに書いてあるようなことは、実はわたしたちの身の回りにいくらかでも起こっていることであり、起こりそうなことです。けれどもそれはどこからか自然災害のようにやってくるだけでなく、主イエスがおっしゃったように、「荒廃をもたらす憎むべきものが、立ってはならないところに立つ」ような人間の罪の姿としてこそ現れるのだと思うのです。それは一人の世界を破壊するような支配者が登場するのかもしれませんが、人の命などなんとも思わず、自分たちの利益だけを考えるある集団かもしれませんが、一発で地上の人間を滅ぼしてしまう爆弾とそのボタンを押してしまう人間かもしれません。さらには、そういうことを放っておく多くの人間であるかもしれないのです。そう考えると「立ってはならないところ」それは結局は神の座であると思います。神ではないものが自分を神とする、神ではないものを神にしたてあげる。それが天地創造の始めから今までになく、今後もないほどの苦難を引き起こすのです。主イエスはこのことをすでにエルサレム神殿に入られた時に見ておられました。神殿、神殿と言いながらまことに神を拝んではいない人間の姿、その立派さに目がくらみ、まことの神を見なくなってしまう人間の姿に、主イエスは憤りを覚えて台をひっくりかし、そして悲しまれたのです。滅びゆくエルサレム神殿は、決して2,000年前のユダヤの人たちだけの問題ではありませんでした。主イエスはそこにすべての人間のすべての罪をすでに見ておられたのです。だから、このような、わたしたちがこの世界で味わうであろう、人間が引き起こすであろう悲惨と悲しみを、主イエスは見据えておられたのです。

主イエスは、このことを前もってわたしたちに伝えてくださいました。そして、「気をつけていなさい」とくりかえしおっしゃいます。これは「注意しなさい」、「よく見なさい」という意味の言葉です。主イエスがここで気をつけていなさい、よく見なさいとおっしゃるのは、置かれた状況や周りからの影響、あるいは心の弱さや賢さというよりも信仰問題だといわれているようです。ある説教者はこう言いました「なぜ何度も、主は『気をつけなさい』、『よく見なさい』と私どもの目を開くように求めておられるのか。それは私どもの目が見るべきものを見失うからです。そして見なくていいものに目を奪われる。そのような過ちを犯しやすい信仰の目だからであろうと思います。また、そのように私どもの目を

惑わすようなものが次々と起こってくるのです」。わたしたちは時に、周りの出来事に動揺し、惑わされ、しっかりと立つことができなくなります。そのことに便乗してあらわれる偽メシア、偽預言者の言葉、フェイクニュースに騙され、その不思議な業に惑わされてしまいます。それは、結局は神ではないものを恐れ、神ではないものを神としてしまう、信仰者として見るべきものを見ていないから起こるのです。

それにしてもなぜこのような苦難が起こらなければならないのでしょうか。主イエスは、この苦難を「産みの苦しみ」(8節)とおっしゃいました。新しい世界が来る時、それまでの古い罪の世界は滅びなければならないからです。新しい命(神の国)が誕生するためには、古い体(罪に支配されたこの世の秩序)は滅びなければなりません。罪の支配から人を解放し、恵みの支配へと導き入れてくださるためには避けられません。罪のまま神のものにしていただくことはできないからです。だからこそ、神はこの苦難の期間を縮めてくださると、主イエスはおっしゃいます。罪のゆえに永遠に苦難の中で苦しむのではなく、救いの完成によって神の支配のもとにわたしたちを導き入れてくださるのです。

わたしたち信仰者は確かに救いを信じて洗礼を受けて、今神の御心に従おうとして生きています。しかしなお、世界について人間について罪の姿を見る現実があります。洗礼を受けること自体が苦しみではなかったかもしれませんが。けれども、神の前に立った時、たしかに自分の罪に向き合わなければならなかったでしょう。また、古い生活から決別することは痛みを伴う時があるのも現実です。個人においては洗礼の時、また自分の人生が終わる時に、罪と苦難とむきあわなくてはなるのは確かなことです。けれども、そう考えますと、人生の特別な時だけでなく、日々、わたしたちはそのままでは人生と世界が終わってしまうような罪の現実の中に生きていとも言えるはずで。しかし、このまま終わるのではなく、救いが完成する、この罪にまみれた自分自身とこの世界が完全に清められて神のご支配の中に置かれる、天の国が来る、という希望が与えられています。

ですから、主イエスはここで苦しみそのものを問題となさったのではなく、主がその期間を縮めてくださると確かなこととして約束してくださいました。永遠の炎で焼かれるのではなく人の子が来て、信じる者達をよびあつめてくださるからです。もちろん今信じていない人たちのことも信じて、この救いに与るようにとまねいてくださっているに違いありません。そのために、主イエスは十字架におかかりになりました。罪の悲惨がどれほどのものか、罪の結末がどれほど悲惨なものか、神の子である罪のまったくない方が十字架で死なれることですでに明らかになったのです。「一切のことを前もって言うておく。」主イエスはおっしゃるだけでなく、ご自分の命によって一切のことを前もって知らせ、その中に導き入れてくださいました。

ですから、「気をつけなさい」、「見なさい」との主イエスの励まして見るべきものは、主イエスご自身です。主イエスは苦難の後に誰も見逃すことのないほどの天変地異をともなあって、大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来てくださる、と約束してくださるのです。この終わりの日が来る、主イエスが再び来てくださる、というマルコ福音書の箇所は、新

約聖書の最後の書物「ヨハネの黙示録」とのつながりを感じさせます。実際につながりがあると、文章上の研究もありますし、そもそも教会はそのように信じてきました。1：7-8「見よ、この方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る。ことに、彼を突き刺した者たちは。地上の部族は皆、彼のために嘆き悲しむ。然り、アーメン。今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者である神、主がこう言われる『私はアルファであり、オメガである。』」終わりの日、すべての人が再臨のキリストを仰ぎ見ます。そこには、主イエスを突き刺した、十字架で脇をついた人もいる、つまり十字架にかけた人、ということです。主イエスを御子として受け入れず殺すほどの罪を犯した人は悲しみの中でこのキリストを見ることにもなるのです。けれども、その日までに、「この人はまことに神の子です」との告白をもって、赦される道が備えられています。黙示録はこう終わります。「また私は、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は過ぎ去り、もはや海もない。また私は、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために装った花嫁のように支度を整え、神のもとを出て、天から降って来るのを見た。そして、私は玉座から語りかける大きな声を聞いた。『見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に濟み、人は神の民となる。神自ら人と共にいて、その神となり、目から涙をことごとく拭い去ってください。もはや死もなく、悲しみも嘆きも痛みもない。最初のものが過ぎ去ったからである。』」

なおわたしたちは、世界の混乱と混沌に罪の姿を見ます。また自分自身もそのようなものに惑わされ不安を覚え、罪の誘惑と戦わなければならない現実を生きています。けれどもそれらの罪をすべて滅ぼしてわたしたちと世界を救うために主イエスが来てくださる。そう約束してくださいました。わたしたちは、終わりの日は主ご自身がわたしたちの目から涙を拭い去ってください。このことを希望として歩み、生きていきます。そしてこの希望は決して遠いものではなく地上を生きている今も、礼拝における御言葉として与えられています。